

「日本の諸港に来るロシアの軍艦は皆この国が友好国だと感じる…」
——明治期の日露関係エピソードの数々——

ワレンチン・スミルノフ

ロシア中国海域艦隊司令官で海軍大佐 I・F・リハチョフが、一八六一年対馬島でロシアの海軍根拠地を建設しようとする試みと関係する一連の出来事から一〇年の歳月が経った。この短い歴史的期間は、ロシアにおいても、日本においても、大規模な変革に満ちている。ロシアでは、皇帝アレクサンドル二世の改革の時代と名付けられ、一方、日本では明治維新と呼ばれている。これらの発展的革命的変化にもかかわらず、この隣国二ヶ国の外交関係は、友好的であり続けた。これに関しては、とりわけ、ロシア国立海軍文書館の文書でも立証されている。

一八七一年一月一日、ロシア海軍元帥、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の兄アレクサンドル二世宛の報告の後で、皇帝侍従武官で海軍大佐、M・Ja・フェドロフスキーは、太平洋艦隊分艦隊の司令官に任命され、「皇帝陛下の」侍従武官、海軍少将の地位に昇格した。¹ ちょうど一ヵ月後、一八七一年二月一日、海軍省長官 N・K・クラツベがフェドロフスキーのために秘密訓令を承認した。その中で、特に次のように指摘されている。

「太平洋艦隊分艦隊保持の主目的は、太平洋における我が国の支配領域を取り囲んでいる海域、および、日本と中国でのロシアの政治的経済的利害の防護、そして、士官および乗組員の実戦教育である。故に、これらの海域に到着後は、我が国の在中國、在日本外交代表部と密接な関係を保ち、我が政府により彼ら外交代表部に示された諸目的の達成を目

指すための彼らの要請の実行に全力を尽くされたし。領事、あるいは、信任された外交代表がない諸港においては、ロシア国民に対し、彼らの安全確保、および、法的権利と利害の保護への可能な限りの全協力を示されたし。³」

まもなく、M・Ja・フェドロフスキーは新しい任務地に向かった。

ロシア海軍軍人たちによる日本人の救出

太平洋艦隊分艦隊の艦艇のひとつに、クリッパー艦イズムルド号があるが、同艦を指揮するのは海軍中佐 M・N・クマニである。⁴ 一八七一年九月、イズムルド号は物資を補充するためホノルルに寄航した。同地でクマニは、ロシアの副領事から書簡を受け取った。その書簡には、ハワイ政府の外務大臣の覚書の写しが添付されていた。

この覚書の中で、外務大臣は次のように述べている。三人の日本人が日本のある港で、日本沿岸を航海するため、ハワイのスクーナー船「*Isle Hyous*」号の船長に雇われたが、彼ら日本人は同意なしにホノルルに連れて来られた。ハワイ政府は、クリッパー艦イズムルド号が長崎に直行するのを知ると、この者たちをできるだけ早く故国に送り届けたいと望み、長崎移送のため、クマニに対し、もし賛成してくればそれは「ハワイ政府に対する好意の印…」として評価すると表明し、クリッパー艦に受け入れることを依頼した。

クマニは、この依頼を拒絶すること、同様に、クリッパー艦上にいる間の日本人たちの食費を受け取ることは不可能と考えた。彼はこれらの者たちをクリッパー艦に収容し、彼らを「海軍の一員扱い」に算入した。

ホノルルから長崎までの航路中、クリッパー艦イズムルド号は、通算四六四〇マイル三四日間帆走し、同じく、二三〇マイル二九日間は蒸気で航行した。一八七一年一〇月二四日、クマニは大公宛の報告書の中で、航海の成果や、領事館から受け取った知らせにより、海軍少将フェドロフスキーがクリッパー艦アルマーズ号【「ダイヤモンド号」とも】でウラジオストクに居ること、まもなく長崎に到着する予定であることを報告した。それ以外に、クマニは、報告書の中で、日本人たちの件の経緯を記し、長崎寄港後、ロシア領事館の助けを借りて、所有物や所持金とともに、この日本人たちを同地の官憲に引き渡すとした。⁽⁵⁾

興味深いことは、イズムルド号がホノルルから長崎に向かっている時、分艦隊の別の艦であるコルベット艦ヴィチャジ号がグアム島にいたことである。一八七一年一〇月一日、ヴィチャジ号艦長、海軍中佐P・N・ナジイーモフのところに、⁽⁶⁾何らかの状況によりこの島に放り出され、日本への送還を求めている九人の日本人が来たのだ。彼らは、ナジイーモフに、知事によって与えられ、グアム島から日本に自由に出航できる権利の書かれた文書を見せた。「我が国の日本政府との友好関係に鑑み、私はこれら日本人をコルベット艦ヴィチャジ号に収容し、規定に基づき水兵身分扱いとして登録しました」と、ナジイーモフは自身の軍務報告書に顛末を書いている。⁽⁷⁾

一八七一年一〇月二九日、コルベット艦ヴィチャジ号は、クリッパー艦イズムルド号より四日遅れて、長崎に到着し、日本人たちは故国に帰還した。⁽⁸⁾まもなく、コルベット艦ヴィチャジ号は、ロシア太平洋艦隊分艦隊の旗艦となった。

海軍少将M・Ja・フェドロフスキーと天皇の初会見

一八七二年六月九日、海軍少将M・Ja・フェドロフスキーは、六月一日午後二時、天皇陛下が、彼と士官たちをご招待くださるとの知らせを受けた。

六月一日、コルベット艦ヴィチャジ号は、横浜停泊地から江戸停泊地に回航し、七隻の蒸気艦からなる日本艦隊と並んで投錨した。日本艦隊の中には、艦隊の旗艦であった装甲艦ジュイジョウカン【龍驤艦】がいた。コルベット艦ヴィチャジ号はジュイジョウカンと二発の国際礼砲を交わした。当時、江戸を守っている砲台の多くは、実は大砲がなく、ヴィチャジ号の礼砲に対して、ただの一発も答礼砲を返さなかった。

停泊地の深度が足りず、コルベット艦は、陸岸から三・五マイルで投錨せざるを得なかった。それ故に、干潮時には、陸との漕艇による連絡は、大変困難であった。

指定された時間、M・Ja・フェドロフスキーは、艦隊参謀長である海軍中佐ナジイーモフ、二名の艦隊副官、五人のコルベット艦士官、二名の士官候補生を伴い、正礼装で、ロシアの代理公使E・K・ビュツォフが賃借しているミタノサキにあるコーウン寺に到着した【後に神田駿河台、次いで虎ノ門の土地を購入】。⁽⁹⁾

昼一二時過ぎ、外務省から二台の馬車が到着、そのうちの一台は、「ヨーロッパ風」の美しい制服に身を包んだ御者に御されていた。これ以外に、M・Ja・フェドロフスキーは、士官用に二台の馬車を雇った。フェドロフスキー自身は代理公使夫妻とともに、外務省の馬車に乗り込んだ。艦隊参謀長P・N・ナジイーモフは駐函館領事A・E・オラロフスキーや士官たちと残りの三つの馬車に乗った【一八六九（明治二）年九月三日の開拓出張所開設以降を「函館」と表記した】。⁽¹⁰⁾ロシア行列のさき

がけは六人の日本人警護隊で、行列の後には四人の警護隊が馬で行った。それ以外に、馬車それぞれには、二人の馬丁が速足の馬に遅れることなく駆けていた。

皇居には大名屋敷の伝統的な建築物があり、広く深い堀と古代ロシアのクレムリンの壁によく似た高い障壁に囲まれている。ロシア人たちは通り抜けることになった、鍛鉄製の重い鉄の門があり、衛兵によって守られていた。壁の上の見張りやぐらには哨兵も見られた。

第四門を通り抜けると、ロシア臣民は、馬車から降り、宮廷服に身を包んだ外務省の役人たちに迎えられた。数歩進むと、さらに、二人の侍従に迎えられ、彼らに招かれ、平屋の館に進んだ。その階段で、海軍少将M・Ja・フェドロフスキーを迎えたのは外相T・副島¹¹と宮内省の儀典官であった。【露国代理公使等の引見は明治五年五月一日（一八七二年六月二〇日）午前一〇時小御所代にて】

控えの間では椅子と茶と菓子と葉巻煙草を勧められ、数分後に、副島種臣はロシア海軍軍人たちを天皇のもとへと招いた。通訳と役人たちはサーベルを控えの間に残した。提督と士官たちは、サーベルをはずさなかつた。

ロシア臣民たちは幾つかの小さくて優美な日本庭園を通った。小橋を何度か越え、周囲を大きく素晴らしい樹木に囲まれた美しい小さな草地を抜けた。宮殿には、表玄関ではなく、脇の、かなり暗く貧しい入口から入った。

ヨーロッパ式の、もつとも、質のよくない、カーペットを敷き詰められた広い廊下をいくつか過ぎて（いくつかの廊下はフェルト製のカーペットだった）、提督、士官、役人たちは、小さな部屋に入ったが、その床もやはりカーペットが敷き詰められていた。フェドロフスキーが入ると、あたかも大きな枠で、部屋の他の場所から離された奥まったところ

ろに座っていた天皇は、座っていた肘掛け椅子から立ち上がった。

天皇は結構身長が高く、約満二二歳であることが判った。だが、天皇は和服を着、日本式の髪型をしていたため、フェドロフスキーには、彼の表情をうかがい知ることができなかった。もし、天皇がヨーロッパ風の髪型をし、へんてこな小さな日本の帽子を頭にかぶってさえいなかったら、もつと風采が良く見えたであろう、と提督には思えた。

天皇の左側、少し後ろには、手に金の刀を持った武器持侍従が、その柄を陛下の方に傾けて、立っていた。六人の侍従は、三人ずつ、応接の間の壁際に立っていた。

普通の礼の後、E・K・ビュツォフが、天皇にM・Ja・フェドロフスキーを紹介した。宮廷の通訳官により、ロシア使節の言葉が日本語に通訳された後、ゆつたりとした藤色がかつた和服の懐から、紙を取り出し、かなり早口で、ただし、あまり大きな声ではなく、次の一文を読み上げた。それは、すぐさま、ロシア語に通訳された。

「初めてお目にかかります。提督の軍艦が我が臣民を保護し、故国帰還の手立てをお与えくださったことを既に報告されましたので、今日、お会いできることは、なによりもまして、嬉しく、寛大なお心に感謝致します。」¹²

「天皇陛下、お目にかかる榮譽をお与え下さり、大変光栄です。また、我が分艦隊のロシア軍艦艦長たちにより数人の日本人に対してなされた功績に対し、お話になられた寛大なお言葉に真に感謝致します。艦長たちの中でも、この海軍中佐ナジイモフのことは、失礼ながら、あえて陛下にご紹介申し上げます。私とロシア海軍士官たちは、日本の方々をお助け致す機会が我々に到来した場合には、いつでも、光栄に存じます。そして、我々は、もちろん、日本の方々に友情を示す機会をなおざりに致すことは決してありません。この友情の気持は全てのロシア

人が一般的に日本人に対して心から抱いているものであります⁽¹³⁾

これらの言葉が日本語に通訳された後、ロシアの海軍少将は礼をし、謁見は終わった。

ロシアの客たちは、再び、迎賓館に招かれ【先の「控えの間」、つまり「控所」に戻った】、ここでは、外相と儀典長が、茶、シャンペン、様々な菓子、葉巻煙草を勧めてくれた。その後、日本の高官たちは、慇懃に別れを告げ、ロシアの客たちに、何人かの侍従たちに伴われ、皇居を囲む、古式の広大で素晴らしい庭園、および、アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公の来日に備えて用意された海浜に立つ郊外の平屋の建物であるハマゴデン【浜御殿】を視察しよう提案した⁽¹⁴⁾。

海軍少将フェドロフスキーは、翌一八七二年六月一二日、士官たちが日本の軍艦を見学する機会を与えるため、コルベット艦ヴィチャジ号を江戸停泊地に停泊することを決定した。非常に雨がちで肌寒い天気が見学の邪魔をしたが、これにもかかわらず、海軍大尉チリコフとコルベット艦上級機関士で海軍機関少尉【*старший механик*】のチュレフは、日本の諸港を巡る航海に際し天皇を護衛した日本艦隊に関する所見をフェドロフスキーに提出した⁽¹⁵⁾。これらは、装甲艦龍驤艦以外、スクーナー艦二隻、クリッパー艦二隻、コルベット艦とブリック艦が一隻ずつである。一人のヨーロッパ人を例外とするだけで、艦隊の司令官、士官、乗組員は全員、日本人であった⁽¹⁶⁾。

日本の大臣とロシアの提督の相互訪問（一八七二年）

一八七二年六月一三日午前中、コルベット艦ヴィチャジ号は横浜停泊地に寄航し、海軍少将フェドロフスキーはビュツォフ公使から、次のような日本の外相T・副島の知らせを受け取った。

「五年前、マリアナ諸島に属するグアム島スペイン統治領の長が貧民

階級出身の日本人を雇い、同島に運びましたが、そこで、彼らは、極めて悲運な状態に置かれました。ロシア軍艦ヴィチャジ号の艦長ナジイモフ氏が、航海の途上で、同島を訪れ、我が同胞の惨憺たる状態を見、九名からなる者たちを長崎に連れてきてくださいました。艦内にいる間、これらの者たちは、手厚くもてなされました。ナジイモフ氏が長崎にお着きになられた際、ナジイモフ氏によりこの者たちに示されたご尽力に対し、知事が謝意を述べましたが、わが国政府に示されましたのご尽力に対し、私は、ナジイモフ氏に我が深謝をお伝えいただきたいと、提督閣下にお願ひ致します⁽¹⁷⁾。」

この日、海軍少将フェドロフスキーと海軍中佐ナジイモフは、副島外相のところ朝食に招かれた。副島はフェドロフスキーとナジイモフ、ビュツォフ夫妻に自分の妻を紹介した。副島の妻は、おそらく、ヨーロッパ人との朝食に出席した最初の日本女性となる。それ以外に、副島の妻はビュツォフ夫人に自宅の部屋をすべて見せ、自分の子供たちをロシアの客たちに紹介した。子供たちのうち、長男は非常に美しい子で、掌院ニコライ神父のところロシア語を非常に熱心に学んでいた⁽¹⁸⁾。

翌日、一八七二年六月一四日、フェドロフスキーはコルベット艦ヴィチャジ号上に副島とその子息を迎えた。大公宛の自己の軍務報告書の中で指摘しているように、「大臣は、見たところ、応対と勧められた朝食に対し非常に満足した様子であった⁽¹⁹⁾。」

一八七二年六月一五日午前、コルベット艦ヴィチャジ号は横浜停泊地を後にした。

ロシア海軍軍人たちの長崎停泊地での天皇への謁見（一八七二年）

一週間後の六月二日、海軍少将M・Ja・フェドロフスキーは、コルベット艦ヴィチャジ号に乗艦し、長崎に寄航したが、自己の大公宛軍務

報告書の中で、天皇と海軍中将K・N・ポシェットの艦隊の到着を待つことに皆は忙殺されている、と述べている。天皇の歓迎のために、長崎に住んでいるヨーロッパ人たちは、「燦然たるイルミネーション」を用意した。日本政府は、いかにより良くアレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公を迎えるかに気遣った。長崎には、英仏の提督たちがいた。フェドロフスキーは、長崎でK・N・ポシェット艦隊の到着を待つと通知した。⁽²⁰⁾

一八七二年七月七日、一六時一五分、信号砲からの二発の号砲が天皇の艦隊の接近を知らせた。信号から数分後、砲艦ティボー・カン一号【第一丁卯艦】がタカボ岬【高鈴島か】を迂回し、その後から天皇旗を掲げた装甲龍驤艦が姿を現した。コルベット艦に五隻の艦艇が従ったが、正午頃、二隻のスクーター艦が天皇の儀仗兵（赤い制服を着、赤い背囊を背負い、白い羽飾りの付いた軍帽をかぶった六〇名）を乗せて接近した。三隻の日本の軍艦は既に朝に旗で満艦飾になった。コルベット艦ヴィチャジ号から天皇旗を見分けられるや、フェドロフスキーは二一発の祝砲を命じ、飾旗の礼を行った。沿岸砲台と到着した日本の軍艦は二一発の礼砲を打ち、水兵たちを帆げたに立たせ、登桁の礼を行わせた。

龍驤艦はコルベット艦ヴィチャジ号の隣に投錨したが、日本の旗を立てた軍艦艇や地元の船の多くは、龍驤艦を取り巻き、物資を積み込み、役人を乗せ始めた。快速艇【Beiboot 帆船で四人から六人漕】のひとつには緑色のカバーが掛けられた箱があった。この箱には天皇の最初の祖先の所有だった剣が収められていた。この剣は天皇の行くところどこにでも付いて行くのだった。剣を乗せた快速艇は、天皇の汽艇の前を行き、天皇が快速艇に乗艦すると、龍驤艦では音楽隊がいくつかの単調な和音から構成された日本の国歌を演奏した。天皇艦隊の全艦艇の乗組員は帆げたに送られ、登桁の礼をし、「万歳」を叫んだ。天皇は、自分の旗を汽艇の艇首の掲揚台に掲げたまま、舷から離れた（これに際して、

装甲艦上の天皇旗は下ろされなかった。そのため、停泊地では天皇旗が二個掲揚されていた）。

天皇がコルベット艦ヴィチャジ号に近づいてきた時、フェドロフスキーは、帆げたに部下を遣わし、登桁の礼を行わせ、「ウラー」を四回叫ぶようにと命令した。天皇はヴィチャジ号の近くを通り過ぎたが、常にコルベット艦ヴィチャジ号を見ていた。天皇の随員たちはヨーロッパ風の衣服を着用していた。だが何人かは帽子をかぶっていないかった。天皇は深い青色のフランス型の制服を着、金刺繍の付いた三角帽をかぶっていた。天皇の汽艇が少し艦隊から離れた時に、日本の軍艦は二一発の礼砲を発射し、飾旗の礼を行った。

埠頭で、臣民の群集が、天皇を迎えた。民衆たちは、深々と頭を下げるよう命じられているだけだったが、日本人の大部分は、地で平伏し、頭を上げなかった。天皇は金刺繍の付いた緑の馬衣で覆われた馬に乗っていた。馬は四人の馬丁に引かれていた、天皇の後には廷臣たちが従った。天皇は、行列の両側から軍隊に守られ、平民の深い沈黙の中、御座所に着いた。

長崎のすべての家は、様々な小旗や提燈にかざられていた。日本人たちが天皇の滞在で幸せであったのは明らかである。ある種の役人たちが、これは、本物の天皇ではない、本物の天皇を見ることは誰にもできない、まぶしくて見ることができないのだからとの噂を熱心に広めて歩いた。

夕方、ヴィチャジ号と日本艦隊、長崎のヨーロッパ人家屋地区、日本人地区にイルミネーションが施された。自分の軍務報告書の中で、フェドロフスキーは「天皇は地元の人に乗り、しのびで停泊地を行ったり来たりしたとの噂である」と指摘した。⁽²¹⁾

長崎滞在の二日目（一八七二年七月八日）、天皇は、「体調不良」とのこと、御座所を出ず、長崎知事【Губернатор Хараски 長崎県権令宮

川房⁽²²⁾のか」がヨーロッパ人から集めた様々な品物や日本の細工、長崎湾にいた活魚を見た。魚のために、庭に二個の大きな木の貯水槽が作られた。

自己の軍務報告書の中で、フェドロフスキーは、次の興味深い詳細を伝えている。

「…この朝、天皇の周辺の人々が、他の日本人はもちろん、ヨーロッパ人たちに対してすら、どんなに強い不信を持っているかを示す出来事があった。天皇はヨーロッパ人の薬屋に薬を求めに使いを出した。薬剤師がこの薬を約一五さじ飲み終わ「らなければ」役人は受け取りを決心できなかった。この時、薬局には海軍大尉スピーツインがいた。スピーツイン大尉が役人の依頼でその薬を飲み、それで、ようやくのことで、日本の役人は薬に毒が含まれていないことを確信した。」

やはり一八七二年七月八日の午前中、長崎知事【権令】が、海軍少将フェドロフスキーに対して、天皇艦隊の総指令長官、海軍次官補【Второй товарищ морского министра 海軍大輔】S・カワムラが、コルベット艦を私的に訪問する予定であると伝えている。川村のところへは、フェドロフスキーが江戸滞在中やはり私的訪問をしている。

日本の海軍中将は、指定された時間に到着したが、私服だった。川村純義に朝食を進めた後、M・Ja・フェドロフスキーは、彼に、コルベット艦や大砲、銃を詳細に見せた。

川村純義は自分の副官にコルベット艦上で見聞した多くのものを書き付けるように命じ、コルベット艦ヴィチャジ号の大砲や清潔で秩序だったさまにとっても興味を持った。この時、我が艦に長崎副知事【長崎県権大参事】モリオカ・マザズミ【森岡昌純】が到着した。森岡昌純はフェドロフスキーに昨日の表敬とイルミネーションに対する天皇の心からの謝辞を伝え、と同時に、天皇が、アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大

公の到着に遅れないよう江戸に急行するため、ロシアの提督も領事も招くことができないことに対して、心からの詫びを伝えた。

七月九日曜日午前八時、全日本艦隊、ヴィチャジ号、アメリカの砲艦モノカシー号は飾旗の礼を行った。天皇は大勢の供回りや日本軍艦の艦長たち、衛兵たちを従え、モルトン船台を視察したが、天皇の目の前で日本の汽船スルタン号が引き出された【進水の方ではなく「引き揚げた」方か】。船台を操作しているのは、ヨーロッパ人ブレッキー、ジリ、ドゥグラスであった。

この後天皇は、鑄造所オコノラを訪れ【飽浦の工部省所轄長崎造船所か】、同所に二時間以上留まり、八五ブードの銑鉄材の鑄造現場を視察した。この鑄造所は日本人が操業していた。

一八七二年七月一〇日曜日朝六時（日時は公式報道による）、天皇はランチから装甲コルベット艦龍驤艦に乗り換え、天皇旗を揚げた。天皇旗に皆が敬礼した。午前八時前、天皇は長崎をあとにし、熊本に向かい、その後、鹿児島を訪問し、江戸に帰った。

練習コルベット艦ツクボカン【筑波】の記述

天皇艦隊のすべての艦艇のうち、ロシア海軍軍人たちが見学することができたのはコルベット艦筑波【以下、原文ロシア語表記「ツクボカン」をすべて筑波とする】である。筑波は日本の海軍兵学寮生徒や若い水兵の教育のための練習コルベット艦である。全部でマスト三本の完全帆走の装備とゴンフレイス社製の二〇〇馬力の蒸気機関を持つ。就航二年でイギリス人から購入された。すべては老朽化し、傷みがひどかった。甲板は広い板で覆われているが、磨り減りや腐食が見られ、多くの箇所が削り取られており、元の大きさが失われ、極めて危うい状態になって

いた。コルベット艦の古さに加え、コルベット艦の清潔さを保つ方策の欠如は、ロシア人に、長くはもたない艦船に多額の金銭を浪費している日本人を気の毒だと感じさせざるを得なかった。

コルベット艦の大砲は、艦の等級にそぐわず、たまたま、日本政府が大砲を購入することができる様々な所からかき集められていた。競売で購入された二〇個の大砲のうち、同じ砲架のものはひとつもなかった。甲板には、ホイットワース社の大砲、アームストロング社の大砲、その他が並んでいた。これらの大砲のうち、ただのひとつも、実弾がなかった。甲板に置かれてある円錐形の様々な口径の砲弾は、どの大砲にも合わなかった。全ての大砲のうち、使えるものは六台、挙げ句、礼砲用のみで、他のものは「付属品がないため」練習用にすら使えなかった。コルベット艦の乗組員は、士官一〇名、士官候補生一〇名を入れて、一九七名からなっていた。

居住甲板や船室は、調理室をのぞいてイギリス流の配置になっていた。調理室は、水兵の食事の煮炊き用に四つの大きな鑄鉄製の大きなべと士官の食事を作るための二つの大きな四角の石製の打ち抜きコンロが置かれていた。このコンロは、可動式で、コルベット艦が航海に出る時は縛り付けられていた。陸上でも、家々でも、有名な日本の清潔さは、艦上の生活には根付かなかった。従って、下に降り、船艙内に近づけば近づくほど、ごみが増えていくのであった。⁽²⁹⁾塩水蒸留装置はコルベット艦にはなかった。

水兵の食事にはコンビーフが入っていたが、一人頭半フントずつ（二〇〇g、スミルノフ注）で、「しかるべき日」にのみだった。パンや乾パンは食材には入ってなかった。それらは米で代用されていた。⁽³⁰⁾

天皇と海軍少将 F・Ja・ブリュメール

半年後、一八七三年一月一日、太平洋艦隊分艦隊の新司令長官に任命されたのは、F・Ja・ブリュメールであった。⁽³¹⁾二月一六日、ブリュメールは、スエズ、インドを経由する航路をとり、シナ海の諸港に向かうよう、命令書を受け取った。⁽³²⁾

数ヵ月後、旗艦コルベット艦ヴィチャジ号に乗艦したブリュメールは早くも日本に着いた。七月一日から一八日の期間、同艦は修理作業を行うため横須賀のドックにいた。その後、火薬を受け取ると、コルベット艦は横浜に回航した。

まもなく、ロシア代理公使 E・K・ビュツォフも帯同し、ブリュメール提督は江戸で天皇に謁見した。一八七三年七月二一日、元帥コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公宛の自己の軍務報告書で、ブリュメールは、この件について以下のように報告している。

「私は天皇陛下に謁見する光栄に浴しました。私に従ったのは、艦隊参謀長で海軍大佐ナジイーモフ、艦隊副官、海軍少尉ヴィレニウス、海軍大尉エルモラエフ、スピーツインでした。陛下のところでの謁見は非常に短く、ただ単に我々の名前を披露するだけで終わりました。その後はすぐに辞去しました。天皇は日本の正装をし、一方大臣はヨーロッパの金刺繍の制服を着ていました。⁽³³⁾」

江戸の海軍兵学寮におけるロシア海軍軍人（一八七三年）

F・Ja・ブリュメールと彼の士官たちは、外務大臣の許可を得て、江戸の海軍兵学寮を訪問した。同校では年齢一歳から二三歳までの定員一六〇名ほどが学んでいた。

生徒たちは、年齢によって二つに分けられていた。低学年は定員四〇

(211) 「日本の諸港に来るロシアの軍艦は皆この国が友好国だと感じる…」(スミルノフ)

名の男子生徒でひとりのオランダ人の監督下にいた。

海軍兵学寮低学年の授業は日本語で行われた。科目は数学、地理、歴史、また国語それ自体も学んだ。ロシア士官たちが訪れた時、一部の生徒は代数の問題を「かなりの速さで正確に」解いていた。

高学年は海軍専門科目が教授されていた。砲術、力学、操船術は、兵学寮長補佐サワ【澤太郎左衛門】の指導で、オランダ語から日本語に翻訳された本で学んでいた。澤は自身、数年間オランダで学んだ。もうじき、イギリスから高学年の教育者であり、英語による専門科目の教官となるべく四人の海軍士官が招聘されることである【一八七三年来日した英国海軍顧問団は海軍少佐アーチボルト・ルシアス・ダグラス (Archibald I. Douglas) 以下総勢三四名】。澤はロシア海軍軍人たちに、一年後には何人もの生徒たちが海軍士官になるための準備が完了するであろうと話した。既に艦隊勤務をしている士官たちは、生徒としては、海軍兵学寮で教官たちによる個人教授を受け、やや上級の知識のみを教授され、そこから得たわずかな知識の助けを借り、部下たちを指揮していた。⁽³⁵⁾

F・Ja・ブリュメール提督の二度の函館訪問（一八七三年、一八七四年）

一八七三年七月二八日、コルベット艦ヴィチャジ号は函館停泊地に投錨した。街を見物した後、海軍少将ブリュメールは、九月八日コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に次のように報告している。

「現在、函館は通商関係に自己の意義を失いました。この一年、ただの一隻の商船も函館を訪れませんでした。当地に居住するヨーロッパ人たちに必要な商品は、一ヶ月に一回、横浜から、アメリカの郵便汽船で運ばれます。地元の産物、例えば、昆布、煙草、干し魚もまた、日本の

近海航行船で近郊村落に運ばれます。⁽³⁶⁾」

ブリュメールと彼の士官たちは、それより二ヶ月ばかり前日本政府により創立された函館ロシア語学校を訪れたが、そこでは五〇―六〇人の少年たちが学んでいた。まもなく、学校は「特別の建物」を与えられることになりそうで、そうなれば、生徒たちは一〇〇名に上るだろう。ロシア語、歴史、地理の教師の任務は、ロシア正教会付属の元聖歌読誦僧であるサルトフにより行われた。サルトフは月に二〇〇ドルを貰っていたが、その額は、自己の任務をいかに成功させ、遂行に誠実であるかにより、三〇〇ドルまで引き上げられるはずである。

半年ごとに、生徒たちは試験を受けなくてはならず、最優秀生徒には、奨励金として、月に一〇ドルずつ報奨金が与えられた。それ以外に、これらの生徒たちが成功すると、外務省とサハリン島の役人任務への任命に際して、考慮された。サルトフは提督に、日本政府は、教科書や様々な書物、そして、青少年を育成することができるとのほとんどすべての入手に、おしみなく、資金を支出していると、報告した。⁽³⁷⁾

一年後、一八七四年八月三日、海軍少将ブリュメールは再び函館を訪れた。この時は、すでにコルベット艦アスコリド号に乗艦していた。函館停泊地には、ジャンク以外に、船は一隻もいなかった。しかし、数日後、ウラジオストクからイギリス艦隊、横浜からは日本汽走軍艦とドイツのフリゲート艦エリザベータ号が到着した。⁽³⁸⁾

アスコリド号到着の三日前に駐函館ドイツ領事、ルードウィヒ・ハーバー⁽³⁹⁾が日本の狂信者ヘドヘチカ・タザキ【田崎秀親】によって殺害されていたのであるから【実際の殺害日時は一八七四年八月三日】は他と同様に露歴【このフリゲート艦の出現は、きわめて時宜を得たものであった。日本の法廷はヘドヘチカ・タザキに斬首刑の判決を言い渡した。

これらの軍艦以外に、日本の北岸を測量していた日本の提督が汽走軍艦で到着した。

「現在、函館は、本年末には開通するものと思われる電信線によって江戸と連結している。」とプリユメールは、一八七四年九月八日、横浜からの自己の報告書の中で伝えている。⁽⁴⁰⁾

この訪問時、政府の函館ロシア語学校は、生徒数が減少していた。というのは、前の教師サルトフが、残念ながら、急死し、政府はこの時まで新しい教師を見つけないでできなかったからである。函館の住民の考えによれば、この状況が変わらなければ、おそらく、学校は江戸に移されるはずのことだった。⁽⁴¹⁾

海軍少将 O・P・プズィノの天皇への謁見

一八七五年三月末、太平洋艦隊分艦隊の司令長官に任命されたのは、O・P・プズィノであった。⁽⁴²⁾ O・P・プズィノは、七月一日、アメリカの郵便船で上海から長崎停泊地に到着、七月二日、太平洋艦隊分艦隊司令長官になる。これに際して、海軍少将 F・Ja・ブリユメールは自己の旗を下ろし、一方、プズィノは自分の旗をコルベット艦アスコリド号に掲げた。一〇日間の停泊中に、プズィノは、日本の地主と契約を結んだ。契約内容は、ロシア海軍軍人たちに一〇年期限で、蒸し風呂、病院、艦載ポート収納小屋、鍛冶場用の土地を賃貸借するというものである。⁽⁴³⁾

一八七五年一〇月二二日、天皇誕生日にあわせて、分艦隊のすべての艦艇は、横浜の知事に招待され、午前八時、飾旗の礼を行い、正午に一発の祝砲を発した。この日、プズィノは、神奈川知事【県令】陸奥宗光⁽⁴⁵⁾のところの公式正餐に呼ばれた。⁽⁴⁶⁾

一八七五年一〇月二四日、海軍少将プズィノは、自己の旗をコルベッ

ト艦バヤーン号に移した。一〇月二七日、プズィノは、駐日ロシア弁理公使 K・V・ストルーヴェ⁽⁴⁷⁾、艦長たち、艦隊参謀長【*par-kamran*】、二名の艦隊副官とともに、天皇に謁見した。【以下も含め『明治天皇紀』明治八年一月八日の項参照】

日本の省との予備協定により、太平洋艦隊分艦隊司令長官、弁理公使は、あらかじめ作られた歓迎の辞を二部持参しなくてはならなかった。天皇の御前で読み上げるためのロシア語版と天皇陛下への上奏のための日本語版の二部である。

宮殿に到着後、ロシアの代表たちは宮内大臣【宮内卿・徳大寺実則、侍従長兼任】と何人かの高官を迎えられた。タピストリーが唯一の飾りであり、華やかな日本工芸品の屏風が二対広げられた二つか三つの部屋を抜け、客たちはヨーロッパの家具がある小さな応接の間に導かれ、天皇が玉座の間に入ってくるのをしばらく待つよう求められた。数分後、宮内大臣が、先に進むよう促した。陛下は、ロシアの賓客を玉座の前で待つっており、ロシア人たちの叩頭に対して会釈で答えた。

宮内大臣はロシアの客から日本語版一部を受け取り、その後、ストルーヴェが自己の挨拶を読み上げた。

「天皇陛下、今日、わが皇帝陛下の神聖なるご命令により、太平洋艦隊司令長官に任命されました海軍少将プズィノにご謁見を賜るご同意を下さいましたことに對し、陛下に、心からの感謝を申し上げます。プズィノ提督は、最近、サンクト・ペテルブルグから日本に参りました。日本帝国のいくつかの諸港を訪問致しましたが、御国を好きになる機会を得ました。御国に対して、ロシア人は全面的な好感を持ち、また、とりわけ、ロシア海軍軍人において御国が、友好と歓待の国と見なされているのも故なきことではありません。今日の謁見の場をお借りし、我が政府ならびにここに居るロシア人すべての名において、先頃お迎えになられ

ました高貴なご誕生の日に対しまして、天皇陛下に心からのお祝いを申し上げますとともに、更なるご多幸をお祈り申し上げます。陛下に心からの感謝を申し上げます。」⁽⁴⁸⁾

その次に、O・P・ブズィノが挨拶の言葉を読んだ。

「天皇陛下。我がロシア皇帝のご意思、その神聖なるご命令により、太平洋艦隊司令長官に任命され、就任後直ちに、私は、ロシアと日本の間に存在する友情と好意の気持ちを示すために、私に任せました我が艦隊とともに日本海域に入ることを急ぎました。日本の諸港に来るロシアの軍艦は皆この国が友好国だと感じています（強調はスミルノフ）。遠く離れた日本各地の海岸でロシア海軍軍人たちに示されているご親切とご歓待に対し、全ロシア海軍軍人の名において、天皇陛下に心からの感謝を申し上げます。陛下の政府の注意深いご尽力のおかげで、今日の夜間の航海を安全にする多くの灯台が建設され、海と海岸が調査され、日本の海軍は完成に向かって急速に進展しています。日本と友好関係にある大国の海軍の代表として、既に達成された結果をお祝い申し上げますとともに、日本と同様に四方を海に囲まれたすべての国家とともに、国家の偉大さと国力の基礎となる事業のさらなるご発展を心からお祈り致します。」⁽⁴⁹⁾

O・P・ブズィノは述べた言葉の中で、自分のことを艦隊の司令長官であると名乗り、艦隊分艦隊のとは言わなかった。これは、彼に与えられた特別訓令に基づいたもので、外国の艦隊の司令官との付き合いでは、そのように名乗るようにと指示されていたのである。⁵⁰

天皇は日本語で読み、答えた。次のように述べた。

「ロシア皇帝陛下が貴官を太平洋艦隊司令長官にご任命なさったことにより、貴官は、今日、初めてわが国においてなられました。この機を逸することなく、現在、お目にかかれましたことは、大変嬉しく存じ

ます。貴官方が、我が国のいたるところで、友情に満ちた歓待をお受けになられ、貴官方にとり、日本でのご滞在が快い思い出として、末長く残ることを希望致します。」⁽⁵¹⁾

この後、ブズィノは、全士官を階級順に紹介した。これで謁見は終わり、ロシア人の客たちは謁見の間から退出した。

部屋からでると、宮内大臣がロシア艦隊司令官に天皇の書状を渡した。客たちは謁見の間に再び座るよう招かれ、ワイン、葉巻煙草、様々な日本の菓子を饗された。これらを食した後、ブズィノとストルーヴェ、その供たちは、別れの挨拶をし、去った。

O・P・ブズィノ提督の海軍兵学寮視察（一八七五年）

次の日、一八七五年一〇月二八日、日本海軍大臣は海軍少将ブズィノに海軍兵学寮の視察を勧めた。

ロシアの提督は分艦隊艦艇の何人かの士官たちとともに兵学寮に向かった。兵学寮の建物は、広大な空間に散らばっていることが分かった。低学年の生徒たちは、別棟の二階建ての建物にいた。全生徒は、五つのコースに分けられ、各コースは更にクラスに分かれていた。

教官の大部分は、イギリス海軍の士官だった。英語の学習は一番低学年のクラスから始まった。ほとんどすべての一般教養と専門科目の教科書は英語で書かれていたが、いくつかの教科書は日本語だった。兵学寮校長は、ブズィノに、日本語の航海術と航海実習の教科書を贈った。兵学寮には体育室があったが、とても貧弱だった。図書室の蔵書はほとんど英語とオランダ語で構成されていた。

個々のクラスでは生徒たちが海図の製図をしていたが、ブズィノの考へでは、非常に上手かった。兵学寮には二台の生徒の訓練用に実戦砲台があった。ひとつは、敷地内にあり、滑腔砲【原語трапкоцтеное

орудиеは гладкоствольное орудиеか」、もうひとつは海岸にあり、大きなライフル砲。兵学寮の建物の向こうにびたりと接する運河には、小さなクリッパー艦が置かれ、そこには、索具作業の教官を務めるイギリス水兵二五名がいた。

兵学寮には約二〇〇名の生徒がいた。その中には、皇族の一員である一〇名近くの少年たちもいた。彼らは、他の生徒と一緒にのクラスで学んでいたが、生活は特別の宿舎でしていた。

すべての生徒たちは、非常に清潔な、青色のおそろいのジャケットを着ていた。兵学寮は開校後既に五年が経過していた。一八七五年、最初の卒業式が行われた。三五名が、コルベット艦筑波でサンフランシスコに派遣され、航海から戻ってきた暁には、士官になることになっている。海軍兵学寮視察後、ロシア海軍軍人たちは、休息のため、少し食卓に着くよう招かれ、その際、ワイン、果物、ボンボンを饗された。⁽⁵³⁾

○・P・プズィノ提督の横須賀海軍工廠視察（一八七五年）

翌日、一八七五年一〇月二十九日、○・P・プズィノは、海軍大臣で海軍中将カワムラ【川村純義】から、横須賀海軍工廠の視察をするよう招待を受けた。河川外輪汽艇がロシア海軍提督の裁量下に提供された。プズィノと一四名の士官が同汽艇に到着すると、ロシア海軍軍人たちの海軍省への往復に随行する海軍大臣がすでに乗艦していた。

プズィノは、自己のコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公宛軍務報告書の中で、次のように報告している。

「…現在、新に、造船台で帝国のヨット艦とクリッパー艦が建艦されています。一隻の砲艦アシマ【東】号が、下ろされ、完成作業が行われています。砲艦アシマ号には、まもなく機関が最終的に装備される予定です。」

汽船造船工場では目を見張るばかりの秩序と清潔さがあります。建造作業場では、建設中のヨットのため、四〇〇馬力の機関が組み立てられています。ドックには、フサードニク号とともにサハリン島に行ってきたクリッパー艦が置かれていました。海軍工廠はフランス軍の士官たちにより運営され、助手として日本人が付いています。工員はすべて、もっぱら日本人です。指導者の中には、フランス人もいますが、少数です。視察の後、我々はちよつとした朝食に招かれました。その後、横浜に戻りました。⁽⁵⁴⁾

これ以外に、自己の軍務報告書の中で、プズィノは、日本海軍は、二個の艦隊、すなわち、東部艦隊と西部艦隊に分けられる予定の一八隻の艦艇からなっていると報告している。東部艦隊は江戸地区を基地とし、北方の諸港を往復し、ウラジオストクにすらも寄航する予定である。西部艦隊は長崎に基地を持ち、日本の南部諸港を行き来し、台湾島までの地区を行動範囲とし、中国の諸港にも寄航する。⁽⁵⁵⁾

以上述べてきたことから、明治時代の初期に関し、我々は次ぎの結論を導き出すことができる。

一、日本各地の諸港でロシア海軍軍艦は地元の住民たちに常に温かきもてなしを受けた。

二、ロシア海軍軍人たちは、数回にわたり、日本人たちを太平洋の南洋諸島から故国に送還した。

三、日本の天皇は、一度ならず、ロシア太平洋艦隊分艦隊司令官たちを自ら直接に謁見した。

四、ロシア海軍軍人たちは、日本の造船所、軍艦、海軍兵学寮を訪れる機会があった。これに際して、時が経つとともに、彼らは、造船建造の発達過程を見ることになった。未来の日本海軍士官の教育に

においても同様である。士官の中には皇族もいた。造船と将来の海軍軍人たちの教育は、イギリスの海軍軍人とフランスの専門家が日本人を助けた。

五、サハリン島と外務省での今後の活動を目的とする、将来の役人養成のために、一八七三年函館に日本政府によりロシア語学校が建てられた。残念ながら、一八七四年、教師の死去により、学校のその後には不明のままである。

〔註〕

- (1) フェドロフスキー、ミハイル・ヤコヴレヴィチ（一八二五—一八八二）「皇帝陛下の」侍従武官、海軍少将（一八七二）。英仏艦隊からのペトロパヴロフスク（カムチャツカ）攻防戦に参加（一八五四）。様々な艦艇に乗艦し、一度ならず太平洋を航海した。太平洋艦隊分艦隊司令官（一八七二—一八七三）。
- (2) ПЯВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 2.
- (3) Там же. Л. 15-15 об.
- (4) クマニ、ミハイル・ニコラエヴィチ（一八三一—一八八九）海軍少将（一八八二）。クリミア戦争に参加（一八五四—一八五五）、セヴァストポリで負傷。一八六七—一八七二年太平洋航行を遂行、この間、スクリュー・クリッパー艦イズムルド号艦長（一八七一—一八七二）。
- (5) ПЯВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 96-97.
- (6) ナジイモフ、パーヴェル・ニコラエヴィチ（一八二九—一九〇二）海軍大将（一九〇二）。クリミア戦争時、英仏海軍からのクロンシュタット港湾防衛戦に参加（一八五四—一八五五）。一八五八—一八六一年、在日箱館領事館付。一八七一—一八七三年、ロシア太平洋艦隊分艦隊の旗艦であるコルベット艦ヴィチャジ号の艦長。一八八九—一八九一年、ロシア皇太子（後の皇帝ニコライ二世）を日本に送り届けた太平洋艦隊司令長官。一八九二—一八九八年、水路総局長官。海軍参議会会員（一八九四）。

(7) ПЯВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 148 об.

(8) Там же. Л. 149.

(9) ビュツォフ、エヴゲニイ・カルロヴィチ（一八三七—一九〇四）ロシア外交官、三等文官（一八八七）。最初の常設駐日ロシア外交代表。東シベリア総督 N・N・ムラヴィヨフ（一八五六—一八五八）付きの外交部門書記官。アイグン条約締結（一八五八）に至る露中交渉に参加。一八五八年からロシア外務省勤務。一八六二—一八七三年、駐中、駐日外交代表、総領事勤務。駐天津領事（一八六二—一八六五）、駐箱館領事（一八六五—一八六九）、駐中国代理公使（一八六九—一八七〇）、一八七一年、最初の駐横浜ロシア領事、駐日代理公使兼任、駐中国公使（一八七三—一八八三）、駐ギリシア公使（一八八四—一八八九）、駐イラン【ベルシア】公使（一八八九—一八九七）、駐スウェーデン・ノルウェー公使（一八九七—一九〇四）。バーデン【ただ Badeni bei Wienの方】で死去。

(10) オラロフスキー、アレクサンドル・エビクテトヴィチ（一八四五—一九一〇）。ロシア外交官。ロシア帝国の最初の駐シャム王国大使。最初の外交官勤務は中国。北京大使館【領事館】勤務（一八五九—一八六七）、天津領事（一八六八—一八六九）、駐函館領事館長【領事】ではない【一八七〇】、駐函館領事（一八七一—一八七四）、駐長崎領事（一八七四—一八八〇）、アメリカでは駐サンフランシスコ総領事（一八八一—一八九二）、駐ニューヨーク総領事（一八九一—一八九七）。一八九七年二月、ロシアの東南アジア権益を守るため駐シャム総領事。弁理公使、ロシア帝国の最初の駐シャム王国ロシア大使（一八九八—一九〇七）。一九〇八年カイロ居住。アメリカ女性メラ・ハリエツトと結婚、四人の女をもうける。

(11) 副島種臣（一八二八—一九〇五）日本の政治家、外交官。外務大臣（一八七一—一八七三）【正式には、一八七一年二月一日（明治四年一月四日）から一八七三（明治六年）年一〇月二日では「外務卿」、それ以降は「外務事務総裁」。ただし、本稿ではすべて著者の表記どおり「外務大臣」とした。実際に「外務大臣」の名称への改称は一八八五（明治一八）年二月二日から、内務大臣（一八九二）、枢密院副議長

【вие-преселателъ Тайного совета】(一八九一—一八九二)。愛国公党【Сочредителъ Патриотической гражданской партии】の共同設立者(一八七四)。

(12) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 410.

(13) Там же. Д. 410 об.

(14) 一八七二年一〇月、海軍中將 K・N・ポシェットとアレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公(皇帝アレクサンドル二世の第四子)が乗艦したフリゲート艦スヴェトラナ号が長崎に立ち寄った。長崎県知事で天皇の代理、ウワジマ公【伊予宇和島藩八代藩主・伊達宗城】はフリゲート艦に乗艦した【宗城乗艦は明治五年九月二六日】。まもなく、ロシア艦は、大阪、神戸、その後は、横浜に行ったが、そこから、アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公は随員とともに、鉄道で首都に向かった。大公はプラットフォームで有栖川宮熾仁親王に会った。浜離宮(海浜にある)のエンリョカン【延遠館】の国賓の間を割り当てられた。その迎賓館で、一月五日ロシア皇帝の代表が日本の天皇に謁見したが、それは、外交儀礼的性格を帯びていた。【明治五年一〇月一六日参入】

(15) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 411.

(16) Там же. Д. 411-415 об.

(17) Там же. Д. 415 об.-416 об.

(18) ニコライ・ヤポンスキー(カサートキン、イワン・ドミートリエヴィチ、一八三六—一九二二)宣教師、日本のロシア正教会の創始者。大主教【архиепископ】(一九〇六)。一八六一年から日本在住。一八七〇年ニコライ・ヤポンスキーの請願により、日本のロシア正教会が江戸(東京)で、カムチャツカ府主教管轄下に成立した。

(19) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 416 об.-417.

(20) Там же. Д. 420 об., 424 об.

(21) Там же. Д. 430.

(22) Там же. Д. 427-429.

(23) Там же. Д. 429.

(24) 川村純義 (Kawamura Sumiyoshi, 一八三六—一九〇四) — 日本の海軍大

将(一九〇四)。一八七四年、台湾作戦【台湾出兵】の際、日本海軍を指揮【海軍中將兼海軍大輔】。一八七七年薩摩県で起きた反乱鎮圧のため三〇万の陸軍を指揮【西南役征討参軍】。海軍卿【Морской министр】(一八七五—一八八〇、一八八一—一八八五)。一八八五年以降政府顧問【枢密院顧問】、一九〇一年生まればかりの迪宮(後の天皇裕仁)とその弟、秩父宮【淳宮】(雍仁)の御養育掛。海軍大将の名称は死後獲得。

(25) モルトン造船台【Мортовъ эллинг】とは、小艦艇を揚陸するための施設【船舶修理の際、潮の干満を利用して斜面状に作られた「船台(slip)」に引き上げるための一連の装置で、建設が安価なために、乾ドックの代用として使われた。パテントスリップ(Patent Slip)。日本では一八六八(明治元)年一二月長崎小菅に船体修理施設として造られた。天皇の小菅修船場行幸は新暦七月二日なので合っている】。この名は一八一八年、このタイプの造船台を最初に建設したスコットランドのエンジニア、モルトン【Thomas Morton】にちなんで付けられた。

(26) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 430-430 об.

(27) ホイットワース、ジョセフ (Whitworth Joseph, 一八〇三—一八八七) — イギリスの機械技師、ライフル銃【ホイットワース銃】とライフル砲の発明者【設計者】。

(28) アームストロング、ウイリアム・ジョージ (Armstrong William George, 一八一〇—一九〇〇) — イギリスの技師、大砲設計者、工業家、男爵。

(29) 下層船艙内(イントウリュム)【Intrum】とはキールの下の船艙【trum】内空間。

(30) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3207. Л. 430 об.-431 об.

(31) ブリュメール、フォードル・ヤコヴレヴツァ(一八一九—一八八九)。海軍中將(一八八一)。司令長官太平洋艦隊分艦隊(一八七三—一八七五)。

(32) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3335. Л. 10.

(33) ビレニウス、アンドレイ・アンドレエヴィチ(一八五〇—一九一九)。

海軍中將(一九〇八)。一八七〇—一八七四年コルベット艦ヴィチャシ号で太平洋航海。一八八〇—一八八二年、海軍中將 S・S・レソフスキー

指揮下太平洋艦隊司令部水雷士官、日本の旭日四等勳章受章（一八八一）。
一八八六一一八八八年、海軍大佐S・O・マカロフ指揮下コルベット艦
ヴィチャジ号に乗艦し太平洋において測量に従事。一八九六年クルザー
艦パーミヤチ・アゾヴァ号【アゾフの記憶】号とも表記】艦長、海軍少
将F・V・ドゥバソフ指揮下太平洋艦隊艦隊参謀長。海軍技術委員会委
員長（一九〇六一一九〇八）。

- (34) ПЛАНМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3335. Л. 36-36 о6., 38 о6.
- (35) Там же. Л. 39-39 о6.
- (36) Там же. Л. 64 о6.
- (37) Там же. Л. 65-65 о6.
- (38) Там же. Л. 464 о6.
- (39) ルードウィヒ・ハーバー (Ludwig Haber; 一八四三—一八七四) ユダヤ
人商人、一八七四年駐函館ドイツ領事。
- (40) ПЛАНМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3335. Л. 462 о6., 465.
- (41) Там же. Л. 465-465 о6.
- (42) Пзуино, Олестот・Порикалпович (一八一九—一八九二)。海軍
中将（一八八二）。シノップの戦いに参加（トルコ、一八五三）。太平洋
艦隊分艦隊司令長官（一八七五—一八七七）。一八八二年アレクセイ・ア
レクサンドロヴィチ大公指揮下に。
- (43) 一八七六年春、O・P・Пзуиноの司令官旗はすでに設置されていた。
- (44) ПЛАНМФ. Ф. 536. Оп. 1. Д. 25. Л. 1, 6, 26, 76 о6.
- (45) 陸奥宗光（一八四四—一八九七）日本の政治家、外交官。土族の出。
兵庫県知事【一八六九】、神奈川県令（一八七一—一八七八）【一八七一】。
西南戦争【Сагуьское Восстание】に参加したことにより禁固（一八七八
—一八八三）。釈放後、外務省に出仕、駐米公使（一八八八—
一八九〇）。その後、日本政府で働く。農商務大臣（一八九〇—
一八九二）、外務大臣（一八九二—一八九六）。
- (46) ПЛАНМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3453. Л. 86 о6.
- (47) ストルーヴェ、キリール・ヴァシリエヴィチ（一八三五—一九〇七）
天文学者、外交官。プルコボ天文台【Санктот・Петелブルг】の南方に

あるロシア科学アカデミーの天文台】の創始者V・Ja・ストルーヴェ【下
イツ系ロシア人ヴァシリール・ヤコヴレヴィチ = Friedrich Georg Wilhelm
von Struve】の息子。駐東京弁理公使（一八七四—一八七六）、同公使
（一八七六一一八八二）。駐米特命全權大使（一八八二—一八九二）、オ
ランダ大使（一八九二—一九〇五）。

- (48) ПЛАНМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3453. Л. 87-88.
- (49) Там же. Л. 88 о6.-89.
- (50) Там же.
- (51) Там же. Л. 89 о6.-90 о6.
- (52) Там же. Л. 89 о6.-90 о6.
- (53) おそらく、建艦監督の面々を指すのであろう。
- (54) ПЛАНМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 3453. Л. 90 о6.-91 о6.
- (55) Там же. Л. 91 о6.-92.

（翻訳：有泉和子）